

## 聖書 ヤコブの手紙 2章8～13節

今回のテキストが記されている「ヤコブの手紙」は離散している十二部族の人たちに宛てて書かれた手紙となっていますが、実際にはこれはイスラエルの民ではなく、自分たちをユダヤ教の伝統を継承する者と見なしていたキリスト者たちに宛てたものであり、ヤコブという著者名も、ユダヤ人で構成され、ユダヤ教の影響を色濃く残していたエルサレム教会の指導者の名を用いて記されています。そのため「ヤコブの手紙」は律法の意味やその価値の問い直しを下地においた構成が取られており、全体に律法を重んじることを勧める文章となっています。

律法は、福音書の時代にイエスがしばしばユダヤ教指導者層とその解釈で論争していたユダヤ教の教理です。この頃、汎用的な解釈が広まっていたこともその背景にあり、形式的になっている部分があったのでしょうか。イエスの登場以降、その教えを受け入れたキリスト者たちの中でも、律法回帰の保守的な流れを強く求めるグループがあったり、その反対にそこからの解放こそが真の自由への道と解釈するグループもあったりし、律法をどう解釈するかは大きな問題でした。

今日の聖句の中では「隣人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているなら、それは結構なことです、と著者は記しています。その行いの尊さは尊重され、信仰的にも肯定されるべきことと理解されます。

今に生きる私たちにとってもこの「隣人を自分のように愛しなさい」という聖句は、たいへん身近であり、最も重要な教えの一つとして大切にしようとしている聖書の言葉でしょう。しかしその一方で実際の局面にさらされるとき、この言葉を守ることが難しいことを私たちは知っているのではないのでしょうか。

私たちは後になってから、以前の自分が「あんなに」優しく、雄弁で、正しくあろうとしていたことに気付かされるのがままあります。私自身、何度そのような経験をしたことでしょうか。そのたびに自分自身の弱さや乏しさにさいなまされてきました。律法はそのような姿を裁くかもしれませんが、なんとかその弱さを受け入れることの中に、少しでもよく生きようとする内的な変化が生まれることを願っています。

自覚する弱さは、私たちを謙虚にし、憐れみの心を宿す者へと導く杖となるのではないのでしょうか。そして「憐れみは裁きに打ち勝つ」という最後の聖句は、弱く、罪深い私たちをも救われる確信を抱くものではないのでしょうか。そしてその憐れみをいかに行いとして具現化していくことが出来るか。そう問われる者として歩む私たちでありたいと願います。